

どうして県の博物館で、県外や外国の標本を収集・収蔵するのだろうか

平井剛夫

県の博物館「ふじのくに地球環境史ミュージアム」のミドルヤードにいと、いろいろな質問やコメントを受ける。博物館として正式に開館して間もなくのことである。一見してやんちゃそうな小学生が入ってきて、いくつかの外国の昆虫の標本を見て、「あれ、なんでヘラクレスオオカブトがないの」とつぶやいた。「おっ、知っているな、世界最大のカブトムシを、この部屋に展示してないだけで、ここの博物館にはないわけじゃあないんだ」といいかかったが、しばらくして同じようなつぶやきをうけたので、名高い南米産のヘラクレスとネプチューンのカブトムシの標本を日本のカブトムシと一っしょいにして展示することにした。「博物館ならヘラクレスオオカブトをおいてなければ」というのは虫好きのこどもの気持ちからしてわからないでもなかったが、「動物園だったらゾウがいて、パンダがいたらなおいい」とうこととおなじ理屈なんだろうか。

程なく、年配の入館者から「このような外国のチョウの標本は、外国まで出かけて行って集めてくるんですか？」と聞かれ「いろいろな方から標本の寄贈を受けてますから外国の標本も含まれています」と返事したように覚えている。「県の博物館なら外国でなくて県の標本だけでいいんじゃないですか」と鋭いツッコミを受けた。

40年も前、アメリカ・フロリダ州にあって日本の農水省にあたる農務省の研究室に派遣されて害虫防除の技術を修得する機会があった。その研究室ではトウモロコシに被害を与えるヨトウガの一種 *Spodoptera frugiperda* をかれらの種の化学交信を利用した性フェロモンで野外で防除しようとする画期的な方法に取り組んでいた。この方法についてはすでに日本でも研究が進んでおり、私自身も共同研究で取り組んでいた。この研究室の主任からアメリカのこの種でも確認したらどうかと提案を受けた。種類は違って生物アッセイの手段はほぼ心得ていたので快諾して室内試験を進めることになった。



Spodoptera frugiperda

米国フロリダ産 英名: Fall Armyworm

このトウモロコシの害虫は南米から北米のフロリダ半島にまで飛んでくるというきわめて高い移動能力をもった種であった。ところが、まさか太平洋を越えたアメリカにいる害虫が40年もして日本で見つかって問題になるとは思いもしなかった。どういう経路で日本に侵入したかはいまだに仔細には知りえていなかったが、ツマジロクサヨトウという和名がついて、広く日本本州に生息が確認され、さらに驚いたことに、つい最近、沖縄の知人からこの虫についての問い合わせがあった。

現在、博物館では「県勢標本」:「静岡発」、自然史コレクションから見えるもの、として11月7日まで約半年の間、企画展を開催している。県勢標本とは県のゆかりのある標本のことである。必ずしも静岡県でしか見られない生き物ということではなく、明治時代はじめて県内で採集されて新種として記載された種類や、フジやシズオカという名前がついてるため、という縁で県勢標本とされている。昆虫以外に、種々の動物、植物、がこのカテゴリーに含まれることに驚かされる。

世界はますます狭くなっている。ツマジロクサヨトウで示されたように、今後いつどこから昆虫を含めた種々の生き物が侵入してくるかわからない。いついかなるときにこのような事態になるか不明であるがゆえに、然るべき手順を通した標本を確保する必要があるということはいうまでもなく、そのための博物館の収蔵標本を充当させておく必要があるといえよう。